

特に、長谷川慶太郎氏の一連の著作を紹介したい。1980 年の『日本は石油に勝てる』以降、新刊書が出る度に繙いてきた著書は200冊を超える。氏は世界経済と政治軍事の最先端の課題に果敢にアクセスし、その現状を実にわかりやすく発信してきた。表題の近著は共著であるが、米でのシェールガス開発の急進展が世界経済と政治軍事にも巨大な影響を及ぼすことになるかと予測する。ここでも、現在進行中の生々しい経済現象を自分の言葉で的確に解き明かして説明し、その都度、数量的な根拠をも示して、今後の動向を予測するという姿勢を堅持し続けている(この叙述のスタイルは『国富論』におけるアダム＝スミスのものと瓜二つである)。さらに、この30年以上、現実の進展による検証を経ても大きく誤ることがなかったことは、全く驚異的であると言わざるをえない。

氏は、現在の大阪府立茨木高等学校(旧制茨木中学校)の卒業生であることから、学校創立百周年(1995年)行事に招かれ記念講演をおこなった。その内容は『これまでの百年これからの百年』(講談社)にまとめられており、「まえがき」で氏は述べている。「この百年間は日本にとって文字通りの激動の歴史を意味するだけではなく、前半は『戦争』に明け暮れた50年であり、その総決算ともいえるべき1945年、昭和20年は日本が第二次世界大戦に敗北した年である…その前半と後半とのまったく対照的な流れは、あらためて日本国民の一人としても、十分に検討に値するだけでなく、この間に発生した世界全体の流れの変化も、人類全体の歴史として徹底した点検に値するものだったといえる」と。ラディカルに世界を把握し直そうとする真摯な生き様は、ほぼ同世代の司馬遼太郎氏や吉本隆明氏とも共通するものである。